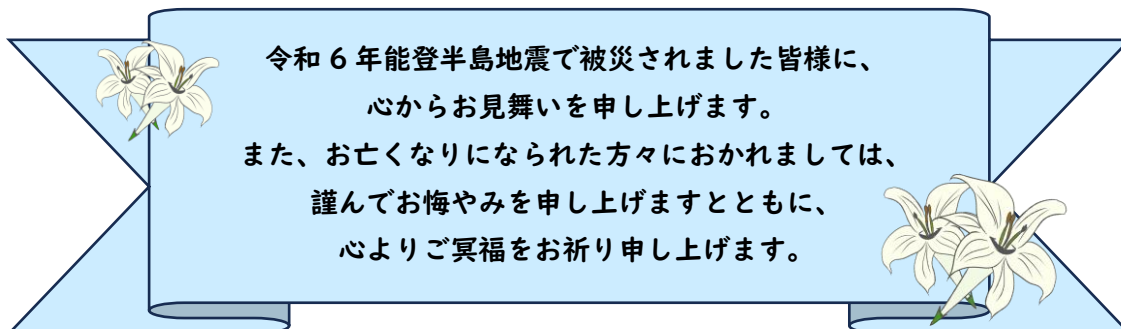




# 日本 DMORT ニュース臨時特集号

## DMORT の公式ニュースレター



1. はじめに 吉永理事長
2. 令和6年能登半島地震 活動報告
  - 1) 石川県珠洲市 第1班 1月4日～7日 3名
  - 2) 石川県珠洲市 第3班 1月6日～9日 2名
  - 3) 石川県輪島市 第2班 1月5日～9日 2名、1月5日～14日;1名
  - 4) 石川県輪島市 第4班 1月11日～14日 5名
  - 5) ロジスティックス隊
  - 6) 後方支援
3. おわりに 村上副理事長
4. 事務局からのお知らせ

## 1. はじめに

### 「能登半島地震への DMORT 派遣」

#### 理事長 吉永和正

2024年1月1日16:10に能登半島でマグニチュード7.6、震度7の地震が発生しました。阪神間でもこの揺れを感じており、その後の報道で大規模地震であることはすぐに認識できました。直後より理事の間ではどのような対応をすべきからの議論が始まりました。

1月2日には愛知県支部が愛知県警に働きかけ、石川県警と連絡をとってDMORTの現地受入の可能性を打診しています。これは2019年に愛知県警と日本DMORTの協定に示され

た「乙(日本 DMORT)は、愛知県の近隣において事件等が発生した場合で、当該事件等の発生地において円滑な活動を行う必要があるときは、甲(愛知県警)に対して発生地を管轄する警察本部との調整の依頼を行うことができる。この場合において、甲は当該警察本部との調整を図るものとする。」という条文に基づいた行動ですが、これが有効に働き、石川県警も受入の方向で動き出しました。また、この時点で愛知支部より派遣人員の調整可能であることの報告がありました。

1月3日の夕方には理事会で愛知から1月4日～7日で4名(第1班)、関西から1月5日～8日で2名(第2班)の派遣を決め、さらに正会員に対して関西からのチーム参加可能なメンバーの募集を始めたところ2名の応募があり、関西からは4名の派遣が決まりました。この時点で派遣関係者のライングループを立ち上げ、これ以降は関係者の情報共有はこれが中心となりました。さらに第3班の編制のために正会員の参加可能な日程の確認を始めました。

1月4日には愛知から第1班が出発し珠洲市に入りました。活動場所としては輪島市も対象ですが、この時点ではアクセスの可能な珠洲市を目指しました。第1班は当初4名のチームでしたが、1名が体調を考えて辞退となりました。ただこの1名はラインを介して派遣チームと連絡しながら後方支援を担当することで活動を開始しており、派遣中の長期を支えることとなりました。このような形式の後方支援が非常に有効であることが示されたのは今回の成果の一つです。理事会で第3班の派遣を決定、さらに DMORT 派遣の最終的な撤収は14日をめどとすることを決めました。

1月5日には関西から第2班が出発し輪島市に入りました。第2班も4名の予定でしたが1名が急な業務のために3名編成となりました。派遣辞退となった1名は後方支援担当で関わりは続けました。この日にやっと会員の皆様へもメーリングリストを通じて報告をお送りしました。この日から夜になってライン会議を始め、現地と後方での情報共有を始め、最終撤収まで続けました。

R6年(2024)1月1日	16:10	発災	震度7
1月 2日		愛知県警を通じて石川県警へ打診	
1月 2日		愛知支部派遣準備完了	
1月 3日		第1班(愛知 3名)、第2班(関西 3名)を決定	
1月 3日		ライングループの立上げ	
1月 4日		第1班 活動開始(珠洲市)	
1月 4日		マニュアル 能登半島地震編	HP掲載
1月 5日		第2班 活動開始(輪島市)	
1月 6日		第3班 活動開始(珠洲市)	
1月 7日		第1班 撤収	
1月 9日		第2班、第3班 撤収	
1月11日		第4班 活動開始(輪島市)	
1月14日		第4班 撤収	
1月14日		石川県DPAT本部、石川県警被害者支援室を訪問	

図 1 能登半島地震における DMORT 活動の流れ

1月6日 第3班が関西より2名で出発、珠洲市に入り第1班から引き継ぎました。  
 1月7日 第1班が珠洲から撤収しました。理事会で第4班の編制と派遣日程を決定しました。  
 1月9日 村上副理事長より会員へ第2報が送られました。この日に第2班、3班が撤収しましたが、第2班のロジ担当1名は輪島に残って活動を続けました。  
 1月11日 第4班が輪島で活動開始しました。  
 1月14日 第4班が撤収しました。さらに理事長(吉永)は石川県庁のDPAT本部を訪ね、今回の活動の概要を報告しました。そのあと、石川県警の被害者支援室長を訪ね今回の活動報告とともに活動への協力のお礼を伝えて最終的な撤収としました。【図1】

今回の派遣メンバーは【表1】に示す通りです。1月4日～14日の11日間にわたって医師1名、歯科医師1名、看護師6名、ロジ担当4名の計12名を派遣し、のべ56名が活動したことになります。

**表1 能登半島地震 日本 DMORT 派遣メンバー**

		4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日
		木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日
珠洲	救命士1	○	○	○	○							
	歯科医師											
	看護師1											
	看護師2			○	○	○	○					
	救命士2											
輪島	看護師3		○	○	○	○	○					
	看護師4											
	調整員											
	医師								○	○	○	○
	看護師5											
	看護師6											
	救命士3											

○：リーダー

**表2 能登半島地震での家族対応件数**

		4日	5日	6日	7日	8日	9日	10日	11日	12日	13日	14日	合計
		木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
珠洲		0	9	25	10	13	0						57
輪島			0	23	9	8	0	9	9	5	6	0	69

珠洲市、輪島市の遺体安置所で、それぞれのチームが多くのご遺族支援を実施しました。その実績を【表2】に示します。珠洲市では計57家族、輪島市では計69家族の支援を行いました。

たが、数字の推移をみて分かるように後半では対応数が減少してきています。初期には多数のご遺体が搬入されていますが、ご遺体は霊柩車や斎場の手配ができ次第、家族に引き取られてゆきました。これらの遺族支援から見送りまでをDMORTは担当しました。【写真1】



**写真1 お見送りの様子**

今回の活動のまとめを【図2】に示します。多数のメンバーが自己完結可能な状況で現場に入り長期にわたって活動できたことでDMORTが目指してきた目標を達成できたと考えています。多くのマスメディアから注目されたこともそのことを裏付けています。その一方で災害現場の大きな組織活動にどのように関わってゆくかはまだ解決できていない問題であり、今後の検討課題として残されました。

- 1月4日～14日の間に珠洲市、輪島市で活動した。
- 12名（医師1，歯科医師1，看護師6，ロジ4）を派遣
- 11日間にのべ56名のメンバーが活動した。
- 完全な自己完結で現場活動をした。
- 多数の府県警察と連携活動ができた
- 遺族支援のみならず、多数のご遺体の整容にも関わった。
- 多彩な遺族の思いに寄り添って活動した。
- 災害対策本部との連携が課題として残された。

**図2 能登半島地震におけるDMORT活動のまとめ**

## 2. 令和6年能登半島地震 活動報告

### 1) 石川県珠洲市遺体安置所 第1班 1月4日～7日；3名

**リーダー救急救命士 新田 満、歯科医師 久保 勝俊、看護師 櫻川 真由子**

1月4日より能登半島入りが決まりました。石川県警とは協定が結ばれていない為、前日に愛知県警の被害者支援室より石川県警察警務部県民支援相談課に取り次いでいただきお話

を伺いました。珠洲と輪島と穴水に遺体安置所が設置されたこと、特に輪島と珠洲で対応が望ましい事を確認したうえで、現地入りが出来そうな「珠洲市」に向かうことを決めました。

今回の活動では特に被災が大きい場所に向かうために、自己完結型の活動が求められました。予定では7日までの活動の為、北川支部長のご厚意で名古屋掖済会病院の防災用保存水と4日分の生活用品を持参し、向かいまいりました。道中に、情報共有を行いました。第一班は、熱海の土砂災害での活動経験があるメンバーでしたが、今回の災害は前回と違い、情報もままならない中での過酷な活動になることをメンバーで共有しました。現地に近づくにつれて、その過酷さを目の当たりにしました。道路はひび割れ、電線は垂れ下がり、倒壊した家屋が目に入ってきました。現地はどうなっているのか、自分たちには何ができるのかを考えながら向かう中、目的地までには1日かかりました。現地には23時過ぎにつき、あと一步のところ、土砂崩れのため、たどり着くことはできませんでした。夜の移動は危険と考え珠洲市役所の駐車場で車中泊をすることに決めました。車中では余震を何度も感じる一夜でした。翌朝に石川県警を訪れ現地までのアクセスの仕方を伺い、現地に辿りつくことが出来ました。石川県警の捜査一課の方々を迎え入れて頂き、遺体安置所では、石川県警、岐阜県警と共に活動を行う事になりました。限られたスペースで、安置所・検案所・ご遺体の保管所が設けてありました。すでにご遺体は並んでいる中、安置所内を県警の方に案内して頂き、早々に活動を行いました。ご遺族は続々とご対面に来ておられる状態でした。連携を取り、それぞれのご遺族に対応させて頂きました。連絡手段がなく、どのご遺族がどの時間帯に来るのかわからない状況下で、臨機応変に対応させて頂きました。ご遺族も被災されている中で大変な思いをし、精神的にも厳しい状況であったため、そっと寄り添い、お話を伺いました。ご説明からお見送りまで、いろいろな場面に寄り添わせて頂きました。活動をして初めてご遺族に関わった時、研修会のロールプレイング訓練と同じだと感じました。計3日間の活動で後発隊に引き継ぐことになりました。ご遺族の方、県警職員から、感謝のお言葉も頂くことが出来ました。災害初期からのDMORTの活動の必要性を感じる経験をさせて頂きました。

## 2) 石川県珠洲市遺体安置所 第3班 1月6日～9日；2名

### リーダー看護師 野口 理恵子、救急救命士 山岡 辰朗

1月6日に石川県珠洲市に入り、9日に帰還するまで活動させて頂きました。

ご遺体安置所は、たくさんのご遺体が文字通りびっしりと並べられている状況で、対面に来られた方々は先ずその多さに驚いておられました。私たちは、お越しになった方々の反応を確かめながら、PFAの原則である「Do No Harm」に則り、声掛けやタッチングなどを通して可能な限りご家族が納得できる対面が出来るよう支援させて頂きました。目視できる範囲の損傷が少ないご遺体が多く、その点では、ご家族の心理的負担を多少なりとも抑えることが出来

たのかもしれませんが、発災が元旦の午後であることからご自宅外での被災も多く、家族再会が遺体安置所である方々も少なくありませんでした。別々の場所におられたご家族が、おられた場所によって生死を分け、本来なら笑顔で食卓を囲んでいるであろう時間に、遺体安置所で合流される姿には、そばにいるだけの私たちも身体が震えるような気持ちになりました。

ご家族の反応は様々とはいえ、研修会で学んだ通りのことが多いのですが、やはりその場にいると過剰に感情移入しそうになったり、反対にお声掛けするのも憚られるような空気感を感じるときもあり、改めて「そばにいること」の意義を感じました。

また、DMORTの本業としての「ご遺族の支援」は、支援対象者目線で考えれば、今回のようなご遺体との対面場面は経過点に過ぎず、その後の心理的支援へと継続していく必要があります、改めて災害時のメンタルヘルスケア全体を俯瞰した支援についても考える機会となりました。お身体を支えさせていただいた方、震えながらも「ありがとうございます」と挨拶して安置所を出て行かれた方・・・お元気で過ごされているか、今もお姿が目に見えます。

まだまだ、被災地では様々な支援活動が行われており、人生設計の変更を余儀なくされた被災者の方々の安寧は遠いかもしれませんが、少しずつ春が近づいてきている今、少しでも暖かい時間を過ごしておられることを祈っています。

### 3) 石川県輪島市遺体安置所（旧輪島中学校）第2班 1月5日～9日；3名 （1月5日～14日；1名）

リーダー看護師 河野 智子、看護師 山崎 達枝、調整員 浅田 恒生

関係機関：石川県警・愛知県警・京都府警・輪島市役所職員 1名

活動3日間で40組のご家族に関わらせていただきました。最初に声かけした者が、ご家族がお帰りなる際の見送りまでの一連の流れを担当しました。ご家族がご遺体との対面の際は、お名前と番号を間違えないように案内し、棺を開けお顔を確認していただきました。ご家族は、ご遺体が整然と安置されている様子を見て、こんなに多くの方が・・・と。金沢の葬儀社から派遣されてきているエンゼルケアのプロの方々により、メイクと納棺をされており、ご家族からは、「きれいにしてもらってる」と喜ばれていました。しかし、葬儀社の派遣の方々が、雪で来られない日が2日間続き、警察の了解を得て、納棺されていないご遺体20体すべてのお顔を清拭し、女性にはメイクを傷には絆創膏を貼りカバーしました。清拭後に確認対面が3体続き”間に合ってよかった”と胸をなでおろしました。安置所には、納棺されているご遺体と納体袋のままのご遺体が混在しており納体袋のままのご遺体のご家族は、「なぜ棺にいれてもらえてないんですか」と質問があり、警察の方から、「棺が間に合っていない届き次第納棺させていただく」と説明されていました。また、死体検案書のお渡しは、検案を施した医師により支払いが発生することがあり、お金をかき集めて持参されたご家族もおられました。警察の方々もつらそうに請求し納金手続きをとられていました。

**救援者支援：**関係機関の皆さんにできるだけお声かけし、労いと DMORT を受け入れていただいたことに感謝の気持ちをお伝えしました。

**所感：**旧輪島中学校は、ご家族にとっては自分の、あるいは、亡くなられた方の母校であった方がおられ、学校での思い出を語るご家族もおられました。低体温が死因となった方が多くおられたのかお顔はきれいでもまるで眠っておられるようでした。ご家族からも「ああ～きれい。苦しまなかったのね。」と。対面の際、みな言葉を失い涙されますが、静かにご遺体に語られる方が多かったように思います。

あらためて、水や電気がある日常がどんなに幸せなことかを実感しました。また、ご家族の方々から、我々に「ありがとう」とのお言葉をくださる方もおられ、感謝しかありません。

愛知県警、京都府警とは事前協定を結んでおり、今回我々は非常に活動しやすく本当によりコミュニケーションがとれたと思います。事前協定の必要性を感じるとともに、愛知支部の日ごろの顔の見える関係作りの賜物であると感じました。また、京都府警との訓練に参加されていた方も活動されており、平時の訓練の必要性も確信しました。

当チームの山崎看護師は、多くの方々とのつながりをお持ちで、貴重なトイレの配置に尽力されラップポンの設置ができませんでした。優しくご家族にお声をかけ、ご家族とすぐに打ち解けられる姿をみて感動しました。また、浅田さんは、ほぼすべての棺を霊柩車まで支え送り出してくれました。警察の方々とも友好的関係を構築し信頼を得ていました。この 3 名で、5 日間活動できたことに感謝、チームワークが何より大切であることを実感しています。

今だ、ご家族のもとに戻れないご遺体が、少しでも早くご家族のもとにお帰りになれるように祈るのみです。

#### **4) 石川県輪島市遺体安置所（旧輪島中学校）第 4 班 1 月 11 日～14 日;5 名**

**リーダー医師 吉永 和正、看護師 久保田 千景、看護師 宮田 郁、**

**救急救命士 野村 佳久・調整員 浅田 恒生**

第 4 班の 4 名(吉永、宮田、久保田、野村)は名古屋駅に集合して午前 8 時に車で出発しました。第 1 班の頃に比べて道路の渋滞はほとんどなくなっており、14:10 頃には穴水町に到着しました。この後も渋滞はなかったものの、道路の損傷が目立つようになり、倒壊家屋の数も増えてきました。輪島市内も渋滞はないものの、著明な道路の段差や倒れかかった電柱が車の運行を妨げているなどの状況が見られました。【写真2】【写真3】

15:20 に遺体安置所である旧輪島中学校に到着しましたが、当初の予想より大幅に早い到着となりました。現場には第 2 班撤収後も浅田が一人残留しており 10 日、11 日と遺族対応を続けていました。浅田と合流することで第 4 班は 5 名で活動することとなりました。第 2 班の活



**写真2・3 活動周辺の状況**

動のおかげで現場には仮設トイレが設置されており、さらに野村(ロジ)がテントを持ち込んだことで、第4班の活動環境は初期とは比べものにならないほど良好なものとなっていました。

輪島到着時には、岩手で納棺師として活動しておられる笹原氏(株式会社桜)が作業をしており、看護師はこの方との交流で、ご遺体への関わりに感銘を受けたとのことでした。ご遺体の尊厳を徹底的に守ることの大切さを学ばせてもらい、翌日からの活動の基盤にもなりました。引き継ぎを受けたご遺体への対応を翌日実施しました。初期に比べて対応家族数も減少していたことで看護師2名は、専門看護師(家族支援看護、精神看護)の視点を基盤に、超急性期・急性期には短時間で行わなければならないアセスメントに余裕を持つことができ、積極的支援の必要性の有無や程度、そして脅威にならないような関わり方をその都度検討しながら関り、常に振り返りを行うことができました。日常臨床での看護活動の基礎である「観察⇒アセスメント⇒実践⇒評価」が、この活動においても重要であることが確認できました。

今回の活動において印象に残ったのは市役所職員の重要性です。その土地の人同士だからこそ分かり合えることが多く、埋葬の説明をするという少しの時間であっても、外部支援の私たちが立ち入ることが難しい時間空間のあることを実感しました。さらに職員へのストレスの大きさも目の当たりにしました。遺族支援とともに DMORT が掲げている支援者支援の重要性を再認識する場面となりました。

第4班も1~3班同様に遺族対応を目指していましたが、もう一つの役割がDMORTとしての撤収作業です。14日9時に吉永理事長、浅田ロジが輪島市役所を訪ね、DPAT本部にDMORTは完全に撤収することを報告し、DMORTの資料を残してきました。その後金沢へ移動しました。13:25 県庁内にあるDPAT本部を訪ねてDMORTの活動報告をしました。残念ながらDPATの一部にはDMORTを初めて知ったという方もおられました。報告の中で看護師の実施したご遺体の整容が家族から喜ばれたことは興味深く聞いていただいたと思います。市役所職員のストレスが大きかったことは具体的事例として伝えました。今後、DPATとの連携をどのようにするかは課題として残されました。

14:20 県警本部を訪ねて被害者支援室長に撤収の挨拶をしましたが、今後災害訓練、講演会などでの協力の依頼があったので、ぜひ協力してゆきたいことを伝えました。初期の過酷



な環境の中での活動があったことで石川県警とは良好な連携関係が構築できたことを確信して帰路につきました。

## 5) ロジスティクス

### 「能登半島地震業務調整員の取り組み」

#### 救急救命士 新田 満、調整員 浅田 恒生

##### (1) 事前準備

今回の活動では、現地の情報が無い事と、自己完結型の活動が求められているという点が今までの震災とは違う形でした。第一班として、被災地で生活できる物品を集めました。大勢の被災者がいる現地の状況に、支援者の心身のケアも必要になります。活動予定期間中の自己完結できる衣食住を考え、車中泊ができるハイエースを用意し、人数分の食料、多めの水、寝袋等の防寒グッズと簡易トイレを用意しました。活動にあたって、食料不足、睡眠不足にならないように心がけました。

##### (2) 交通道路状況を踏まえた移動

活動できるために、まずは隊の安全第一です。その中でも移動経路が重要でした。DMATより頂いた道路情報と、後方支援の報収集による石川県警から頂いた情報を頼りに向かいました。現地に近づくにつれ、情報と現場の相違を目の当たりにし、通れない道も多々ありました。道は亀裂が入り、マンホールは飛び出し、家屋は道を防ぐまで倒壊していました。下の道路だけ確認していると、次は電柱が傾いて、電線が車の上部まで垂れ下がっている状況でした。また、震災直後の為、支援者の車と、現地から出てくる車でかなりの渋滞が発生していました。数時間は動かない時間を車の中で過ごしました。遺体安置所付近には23時過ぎに到着しました。当初は、遺体安置所の駐車場で車中泊を考えていましたが、安置所手前の道路で、家屋倒壊の為通行できませんでした。また現地では携帯電話の電波も途絶えてしまい、連絡が取れませんでした。電気が遮断されていて、街灯もない中でのこれ以上の移動は危険と判断し、携帯の電波が届く、近くの市役所駐車場で車中泊を決めました。翌朝、石川県警に訪問し現地までのアクセス方法を確認しました。

##### (3) 通信手段

遺体安置所では携帯電話の電波が通じない為、後方支援との連絡が不可能でした。そのため定期連絡を、開始時・13時・終了時の3回に決め、13時には連絡係が現地から徒歩15分くらい歩いたところまで移動し、現状報告と今後の予定を定期的に報告しました。

##### (4) 現場での食事

遺体安置所に無事到着したのは移動日の翌朝8時前でした。石川県警に快く受け入れて頂き、遺体安置所のレイアウトを確認し、DMORTの待機場所を確保いたしました。待機場所に給水用の水分や食料を持ち込み、空いた時間に各自食事をとりました。ガスコンロも用意し

ていたため、温かいものも食することが出来ました。また、県警の方にもお湯を提供することが出来ました。

#### (5) 後続隊に向けた情報提供

現場の食料状況、電気の開通状況、車中泊の情報を後続隊に伝えました。後続隊には災害派遣経験者の方がいて、突然の派遣依頼で初めての DMORT 現場活動にも落ち着いて自己完結の準備もスムーズでスタッフ支援に取り組んでいただけました。

#### (6) 今後の課題（浅田 恒生）

DMORT の備品として、御遺体に対するエンゼルケア物品も必要ですが、自己完結できる資機材も必要だと感じた活動でした。連絡手段、インカム無線機や衛星電話、PC や Wi-Fi などの通信機器や車両等々の準備、活動場所が数か所になる可能性があることを念頭に置いた人員確保と配置を考慮する必要がありました。

## 6) 後方支援

### 「日本 DMORT 令和 5 年奥能登地派遣の後方支援について」

#### 看護師 澤田 美和、看護師 黒川 雅代子

令和 6 年奥能登地震派遣において、後方支援班が実施したことについて報告します。

#### 1. 主な後方支援活動

- ①石川県警と派遣要請についての交渉
- ②石川県警と派遣場所の調整
- ③先発隊の自己完結型のための持参物品リスト作成
- ④関係者の Line グループ作成
- ⑤派遣可能メンバー調整(アプリの作成)
- ⑥派遣先までの交通経路、道路状況を随時 LINE 上で情報共有
- ⑦石川県の被災状況を随時 LINE 上で情報共有
- ⑧派遣隊との連絡調整
- ⑨記録のためのクロノロジー作成
- ⑩会議議事録の作成(活動中は毎日)
- ⑪DMORT マスコミ対応覚書(能登編)作成
- ⑫派遣メンバーの勤務先への依頼書作成・配信

#### 2. 警察との派遣要請(①～②)の交渉

日本 DMORT 愛知県支部として、愛知県警察本部 住民サービス課 犯罪被害者支援室の担当者の仲介により、石川県警察本部 県民支援相談課 被害者支援担当者と DMORT 派遣要について交渉を行いました。石川県警担当者(以下、警察担当者とする)は、日本 DMORT のホームページ等から DMORT の活動概要について情報収集した上で電話連絡を

くださりましたが、「死者数は数名(1月2日昼時点)のため、現段階ではDMORTの要請に至らない」というお返事でした。しかし、地震の規模や能登半島の主要道路が寸断されている状況から、被害状況を把握出来ていない可能性について互いに確認した上で、DMORT派遣を想定した情報交換を行いました。警察担当者からの質問は、活動期間・移動方法・1チームの構成人数・職種・活動場所でしたので、1チームの活動が4日間程度で、移動方法は車 or 公共交通機関、構成人数は3名前後、職種は医師・歯科医師・看護師・救命士等で、活動場所は遺体安置所と回答しました。活動場所については想定外の様子でしたが、遺体安置所における遺体の管理は捜査一課が担当でしたので、警察担当者から捜査一課へもDMORTについて情報共有をしてくださいました。また、「派遣要請をするならば能登半島先端の輪島市や珠洲市だが、主要道路も通行止めになっており、警察もDMORTの送迎等はできないため、今回の派遣要請は現実的ではない」という返事でした。このやりとりと同時刻に、正会員のメーリングリストでも、「現状では、すぐに動くことが難しいと考えています。今後、状況をみて派遣を検討してゆきたいと考えています。」という内容が配信されていました。これを踏まえて、DMATとして石川県庁入りしていた愛知県支部の北川支部長と相談し、自己完結型チームで交渉をして良いかを吉永理事長に確認しました。吉永理事長の了承を得た上で、1月2日20時に自己完結型での活動が可能であることを警察担当者に申し出ました。そこから、捜査一課や上層部と検討していただき、その結果1月3日15時30分に正式な派遣要請が発令されました。

警察との交渉と同時並行で、レンタカーの確保と自己完結型活動に耐えられるように物品を集め、愛知県支部から1月4日～7日で派遣できるメンバーを調整し、久保歯科医師、新田救急救命士、櫻川看護師の3名が先遣隊として石川県に入ることになりました。

### 3. 活動中の後方支援(③～⑫)の詳細

先遣隊の派遣に際しては、ネット環境が悪い現地でも比較的つながりやすいという情報のもとLINEグループを作成し、自己完結が可能となるような物品の準備、道路状況の検索、レンタカーの確保等の準備を先遣隊メンバーとともに実施しました。また、スマホの電池切れや通信制限を想定し、後方支援側でWeb検索等を行い必要な情報を共有するよう努めました。後続隊の派遣も考慮し、先遣隊の車に積んだ物品リストを作成しました。クロノロジーの作成や、各チームの報告書をパスワード処理して全体共有し、機密情報の保護にも努めました。今回の派遣に関わったメンバーで構成された振り返り会議では、議事録を作成して活動状況把握と課題が明確になるように努めました。

後方支援班は、過酷な状況下で活動しているメンバーが、安全で安心して活動できることを目標に活動してきました。後方支援者に対して、久保先生から「その場にいたような存在感があった」と言葉をかけられたことは、後方支援者としての誇りにつながりました。

### 4. 今後の課題

災害は急に起こるため、後方支援について必要なことをリスト化する等の準備が必要です。

特に派遣されたメンバーが自己完結型での活動に耐えうる装備を DMORT は持ち合わせていないため、現地の状況の把握、必要な情報の提供ができるような体制を整備していくことが必要だと考えます。

最後に、亡くなられた方々のご冥福と、1 日も早い能登の人々の穏やかな生活を願っています。

## 3. おわりに

### 「今回の活動の後方支援をふりかえって」

#### 副理事長 村上典子

日本 DMORT は 2005 年 JR 脱線事故の黒タッグ遺族の無念の思いを私が学会で発表し、それに共感してくださった、吉永理事長はじめ、たくさんの方々の熱意から始まりました。当初から目指していた「遺体安置所で遺族に寄り添う」という活動が、今回のような大きな地震災害で実現できたことを非常に感慨深く思っております。「ありがとうございました」と現地で活動してくださった方々はもちろんのこと、DMORT を支えてくださったすべての方に心からお礼を申し上げたいです(別に私にお礼を言ってもらう筋合いではないと思われるかもしれませんが)。

とは言え、今回の活動で見えてきた様々な問題もあります。そのうち、他機関との連携についてここで述べますと、一つ目は警察との関係です。今回、石川県警とは協定は締結しておらず、愛知県警を通じての交渉で受け入れてはいただきましたが、今後の災害がどこで起きるのか、その被災警察で必ず受け入れていただける保証はありません。平時からの後方支援としての私の役割の一つは、警察の方に DMORT 活動を周知していただくことと考え、警察関係からの依頼の講演・研修など、積極的に行わせていただいておりますが、(当然ながら)全国すべての警察の方に DMORT を知っていただくところまでは、なかなかいきません。二つ目は DPAT (災害派遣精神医療チーム) や精神保健福祉センターなど、長期的に遺族支援に関わることになる精神医療専門家との連携についてです。近年の災害では「家族(遺族)支援マニュアル」を災害に応じて改訂し、その際に私から必ず DPAT の河嶋譲先生にはメールで送るようにしてきたのですが、今回は派遣が決まった際の報告が抜けてしまいました。さらに私自身が精神科医でなく内科ベースの心療内科医であり、平時からの精神科医の先生方とのネットワークが不十分な面があるため、今一つ DPAT の皆様に DMORT について周知いただくのが難しい面があります。これらの点が少しでも改善していけるよう、努力していきたいと思っております。

また、今回の活動では、出動を申し出てくださった方全員が派遣に結びついたわけではありません。チームごとの職種のバランスや、自己完結型のため車に乗車できる人数が限られていた関係もあり、派遣に備えて準備して下さっていた方にはこの場をお借りして、お詫びいた

します。

今後とも DMORT をよろしくお願ひいたします。

## 4. 事務局からのお知らせ

- ◆ 当法人の会計年度は1～12月ですので、2024年度の会費納入を宜しくお願ひします。  
振込みルールについて：送金者のフルネーム表示でお送り下さい。  
これまでの会費納入の有無につきまして不明の方は、事務局までお問い合わせください。

### 【振込先】

#### ① ゆうちょ銀行

記号:14210 番号:05526671

名前:シャニホンデイモト

#### ② 他金融機関から振り込む場合

店名:四二八(読み ヨンニハチ)

店番:428

預金種目:普通預金

口座番号:0552667

#### ◆ 2023年度会員情報

理事 8人、正会員 29人、登録会員 150人、賛助会員 3団体

#### ◆ 理事名簿】

理事長 吉永和正(医療法人協和会副理事長)

副理事長 村上典子(神戸赤十字病院心療内科部長)

理事 北川喜己(名古屋掖済会病院院長)・愛知県支部長

久保山一敏(京都橘大学健康科学部教授)

黒川雅代子(龍谷大学短期大学部教授)・京都府支部長

河野智子(京都第一赤十字病院看護部)

長崎 靖(兵庫県監察医務室)

山崎達枝(四天王寺大学看護学部看護学科准教授)

監事 鵜飼卓(兵庫県災害医療センター顧問)

#### 【事務局所在地】

住所：〒662-0934 兵庫県西宮市西宮浜 4-15-1 協和マリナホスピタル内

電話：0798-32-1112(代) FAX：0798-32-1222

E-mail: [information@dmort.jp](mailto:information@dmort.jp)

◆編集後記◆

令和6年能登半島地震では、私(山崎)の大切な友人のご自宅が全壊、親しくしてました某元看護部長のご自宅は半壊ですが住めません、知り合いのご主人は帰らぬ人となりました。一瞬にして悲しいことが続き過ぎました。被災地支援に入り惨状を目の前にして、筆舌に尽くしがたい状況下でした。さらに拍車をかけるように過疎化と高齢社会でライフラインは長期間途絶え直接死から災害関連死で亡くなる方など、被災地の生活は過酷です。今後も長期的な支援活動が求められます。被災地を忘れずに微力ですが復興のお手伝いをさせて頂きたいと思います。

DMORTが立ち上がった時に、ある医療従事者より「助けるのが医療者なのに…何で亡くなった家族にも…」と言われました。でも今、突然大切な人・物を失った方々に寄り添うことがどれほど大切なのか、私たちの活動から伝えられると思います。被災された皆様にごく心よりお見舞いを申し上げ、お亡くなりになりました方に、ご冥福をお祈りいたします。(合掌)

(編集担当:山崎・矢野)